

伊勢之卷

泉鏡花

青空文庫

昔男と聞く時は、今も床ゆかしき道中姿。その物語に題は通えど、
 これは東あづまの銭なしが、一ひととせ年思いたつよしして、参宮を志し、霞かすみ
 とともに立出でて、いそじあまりを三河国みかわのくに、そのから衣、ささ
 おりの、安弁当いわたしの鰯いわしの名に、紫はありながら、杜かきつばた若にはには似も
 つかぬ、三等の赤切符。さればお紺あだの婀娜あだも見ず、弥次郎兵衛やじろべえが
 洒落しやれもなき、初ういもうで詣みの思い出草すざり。宿屋すぢりの硯すぢりを仮寝の床に、路みちの
 記の端に書き入れて、一寸御見ちよいとごけんに入れたりしを、正綴ほんとしにした
 今度の新版、さあさあかわりました双六すごろくと、だませば小児衆こどもしゆ
 も合点せず。伊勢は七度ななたびよいところ、いざ御案内者で客を招け
 ば、おらあ熊野へも三度目みたびめじやと、いわれてお供に早がわり、い

そがしかりける世渡りなり。

明治三十八乙巳年十月吉日

鏡花

「はい、貴客あなたもしお熱いのを、お一つ召上りませぬか、何ぞお食あがりなされて下さりまし。」

伊勢国古市ふるいちから内宮ないぐうへ、ここぞ相あいの山の此方こなたに、灯ともしびの淋し

い茶店。名物赤福餅あかふくもちの旗、如月きさらぎのはじめ三日の夜嵐に、はた

はたと軒ゆすを揺り、じりじりと油が減つて、早や十二時に垂なんなんとする

のに、客はまだ帰りそうにもしないから、その年紀としごころ頃といい、容よ

子うすといい、今時の品の可いい学生風、しかも口数を利かぬ青年なり、

とても話対手はなしあいてにはなるまい、またしないであろうと、断念あきらめて

いた婆々ばばが、堪りたま兼ねてまず物優しく言葉をかけた。

宵から、灯も人声も、往来ゆききの脚も、この前あたりがちようど切

目で、後へ一町、前へ三町、そこにもかしこにも両側の商家軒を

並べ、半襟と前垂まえだれの美しい、姐さんねえが袂たもとを連ねて、式かたのごとく、

お茶あがりまし、お休みなさりまし、お飯上まんまりまし、お饅頭うづんもご

ざりますと、媚めなまかしく呼ぶ中を、頬ほっかむり冠かんむりやら、高帽たかぼうやら、菅す

笠げがさを被かぶつたのもあり、脚絆きやはんがけに借下駄かりげたで、革鞆かばんを提たげたも

のもあり、五人づれやら、手を曳ひいたの、一人で大手を振るもあ

り、笑い興きんずるぞめきに交まじつて、トンカチりと楊弓ようきゆう聞え、諸も

白ろはくを爛かんする家やごとの煙、両側ひがしの廂こを籠めて、処ところ柄がらとて春はる

霞すみ、神風かみかぜに鬢たなびく風情、灯ひの影も深く、浅く、奥に、表に、千

鳥がけに、ちらちらちらちら、吸殻も三ツ四ツ、地に溢れて真赤な夜道を、人脚しげにぎや繁き賑かさ。

花の中なる枯木こぼくと観じて、独り寂じやくまく寞として茶を煮る媪おうな、特にこの店に立寄る者は、伊勢平氏の後胤こういんか、北きた畠たばたけ殿の落武者か、お杉お玉の親類はすの筈を、思いもかけぬ上じようかく客一人にん、引手ひくて夥多あまたの彼処かしこを抜けて、目の寄る前途さきへ行き抜けもせず、立寄つてくれたので、国主こくしゆに見出みいだされたほど、はじめ大喜びであつたのが、灯あかりが消え、犬が吠えほ、こうまた寒い風を、欠伸あくびで吸うようになつても、まだ出掛けそうな様子も見えぬので。

「いかがでございます、お酌しやくをいたしましょうか。」

「いや、構わんでも可いい、大層お邪魔をするね。」

とももの優しい、客は年の頃二十八九、びもくしゆうれい眉目秀麗、しようしや瀟洒
ふうさいな風采、ねず鼠の背広に、おなじ同一色の濃いがいとう外套をひしと絡まとうて、茶
なかおれの中折を真深う、顔をつつ肅ましげに、脱がずにいた。もしこの冠
むりもの物が黒かつたら、余り頬ほおが白くつて、病人らしく見えたであ
ろう。

こつくりした色に配してさえ、寒さのせいか、屈託でもあるか、
顔の色がよ好くないのである。銚子ちようしは二本ばかり、早くから並
でいるのに。

赤福の餅もちの盆、煮染にしめの皿も差置いたが、猪口ちよくも数を累かさねず、食
べるものも、かのかみじやま神路山のすぎばし杉箸を割ったばかり。

客はていじけい丁字形に二つ並べた、奥の方の縁台に腰をかけて、てのひら掌で

項うなじをおさえて、俯うつむ向むいたり、腕こまぬをかめてかめて考かんえたり、足あしを投なげて横よこぎまに長ながくなつたり、小こさなしかも古ふるびた茶店ちあんでんの、薄うす暗くろい隅かたなる方かたに、その挙ふる動まいも朦もう朧ろうとして、身み動ごをするのが、余よ所そ目めにはまるで寝ね返がえりをするようであつた。

また寝ねられてなろうか！

「あれ、お客様まだこつちのお銚子さしもまるでお手てが着きませぬ。」
と婆ば々は片かたづけにかかると、前まへの銚子さしを傍かたえへ除のけようとして心付こたく、まだずツしりと手てにこたえて重おもい。

「お爛のぞを直ただしましようにござりますか。」

顔かほを覗のぞき込こむがごとくに土間どまに立たつた、物腰ものこしのしとやかな、婆ば々は、客きやくの胸むねのあたりへその白髪頭しらがあたまを差出さしたので、面おもてを背そむけ

るようにして、客は外との方かたを視ながめると、店頭みせさきの釜かまに突込んで諸白はくちようの爛はくちようをする、大きな白丁はくちようの、中が少くなつたが斜めに浮いて見える、上なる天井から、むツくりと垂れて、一つ、くるりと巻いたのは、蛸たこの脚、夜の色こまや濃こまやかに、寒さに凍いてたか、いぼが蒼あおい。

二

涼ひとみしい瞳ひとみを動うごかしたが、中なかおれ折なかおれの帽ひさしの庇ひさしの下から透すかして見た趣おもてで、

「あれをちつとばかりくれないか。」と言ってまた面おもてを背けた。

深切な婆々は、膝のあたりに手を組んで、客の前に屈めていた腰を伸して、指された章魚を見上げ、

「旦那様、召上りますのでござりますか。」

「ああ、そして、もう酒は沢山だから、お飯にしよう。」

「はいはい、……」

身を起して背向になつたが、庖丁を取出すでもなく、

縁台の彼方の三疊ばかりの住居へ戻つて、薄い座蒲団の傍に、散ばつたように差置いた、煙草の箱と長煙管。

片手でちよつと衣紋を直して、さて立ちながら一服吸いつけ、

「旦那え。」

「何だ。」

「もう、お無駄でござりまするからお止しなさりまし、第一あれは余り新しゆうないのでござります。それにお見受け申しました処、そうやって御酒もお食りなさりませず、滅多に箸をお着けなさりません。何ぞ御都合がおありなさりまして、私どもにお休み遊ばします。時刻が経ちまするので、ただ居てはと思召して、婆々に御馳走にあなた様、いろいろなものをお取り下さりますように存じます、ほほほほ。」

わらい
笑とともに煙を吹き、

「いいえ、お一人のお客様には難有過ぎましたほど儲かりましてございます。大抵のお宿錢ぐらい頂戴をいたします勘定でござりますから、私どもにもう一室、別座敷でもござりますなら、

お宿を差上げたい位に、はい、もし、存じますが、旦那様。」

婆々はかまち框に腰を下して、前まえだれ垂に煙草の箱、煙管を長く膝にし
ながら、今こう謂いわれて、急に思い出したように、箸さしの尖を動か
して、赤福の赤きを顧みず、煮染にしめの皿の黒い蒲鉾かまぼこを挟んだ、客
と差向いに、背屈せこみして、

「旦那様、決してあなた、勿もつた体ない、お急せき立て申しますわけで
はないのでござりますが、もし、お宿はお極きまり遊ばしていらっし
やいますかい。」

客はものいわず。

「一いっ旦たんどこぞにお宿をお取りの上に、お遊びにお出掛けなさり
ましたのでござりますか。」

「何、山田の停車場ステーションから、直ぐに、右内宮道ないぐうみちとある方へ入つて来たんだ。」

「それでは、当伊勢はお馴なれ遊ばしたもので、この辺には御親類でもおありなさりますという。——」と、婆々は客の言ことば尻じりについて見たが、その実、土地馴れぬことは一目見ても分るのであった。

「どうして、親類どころか、定じょう宿やどもない、やはり田舎もの参宮さ。」

「おや！」
と大きく、

「それでもよく乗越しておいでなさりましたよ。この辺までいら

つしやいます前には、あの、まあ、伊勢へおいで遊ばすお方に、山田が玄関なら、それをお通り遊ばして、どうぞこちらへと、お待受けの別嬪べっぴんが、お袖そでを取るばかりにして、御案内申します、お客座敷と申しますような、お褥しとねを敷いて、花を活いけました、古市があるではござりませぬか。」

客は薄ら寒そうに、これでもと思う状さま、爛かんの出来立できたてのを注ついで、猪口ちよくを唇もたに齎もたらしたが、匂においを嗅かいだばかりでしばらくそのまま、持つ内に冷つめたくなるのを、飲む真似まねして、重そうにとんと置き、

「そりや何だろう、山田からずつと入ると、遠くに二階家を見た
り、目の前に茅葺かやぶきが顕あらわれたり、そうかと思うと、足許あしもとに田の
水が光ったりする、その田圃たんぼも何となく、大な庭おおきの中にわざと拵こしら

えた景色のような、なだらかな道を通り越すと、坂があつて、急に両側が真赤になる。あすこだろう、店頭みせさきの雪洞ほんぼりやら、軒のきち提灯ようちんやら、そこは通つた。」

三

「はい、あの軒ごと、家ごと、向三軒両隣と申しました工合ぐあいに、たまころが玉転し、射的あかりだの、あなた、賭的かけまとがござりまして、山のように積んだ景物の数ほど、灯あかりが沢山あかり点つきまして、いつも花盛りのような、賑にぎやかな処かでござります。」

客は火鉢かざに手を翳し、

「どの店にも大きな人形を飾つてあるじゃないか、赤い裨襠しかけを着た姐ねえさん様もあれば、向う顱はちまき巻をした道化もあるし、牛若もあれば、弥次郎兵衛もある。屋根へ手をかけそうな大蛸おおだこが居るかと思うと、腰こし蓑みので村雨むらさめが隣の店に立っているか、下駄屋にまで飾つたな。皆みんな極彩色だね。中にあの三間間口げんまぐち一杯ほていの布袋ほていが小山のような腹を据えて、仕掛けだろう、福相な柔和な目も、人形が大きいからこの皿ぐらいあるのを、ぱくりと遣やつちや、手に持つた団扇うちわをばさりばさり、往來あおを煽いで招くが、道幅の狭い処へ、道どうちゆう中す双ごろうく六で見覚えの旅の人の姿が小さいから、吹飛ばされそうです。それに、墨こもの法衣ころもの絵具が破れて、肌の斑まだら兀はげの様子なんざ、余程すご凄こい。」

「招まねぎも善よし悪あしでござりまして、姫方こどもしゆうこわや小兒衆こどもしゆうこわは恐こわいとおつしやつて、旅籠屋はたごやで魘うなされるお方もござりまする。それで、お氣味が悪わるくつて、さつさと通り抜けておしまいなされましたか。」

「詰つまらないことを。」

客ひきしまは引ひき緊しまつた口くちもと許もとに微笑ほほえした。

「しかし、土地にも因よるだろうが、奥州おくしゅうの原はらか、飛驒ひだの山やまで見た日には、氣絶きせつをしないじや済すむまいけれど、伊勢いせというだけに、何なにしろ、電信柱でんしんばしらに附く着つけた、ペンキ塗ぬりの廣告こうごまで、土佐とさ絵えを見るような心持こころもちのする国くにだから、赤あかい唐縮緬とうちりめんを着きた姐あねさんでも、京きやう人形にんぎやうぐらいには美うつくしく見える。こつちへ来きるといので道中みちなも余よ

所とは違つて、あの、長良川、揖斐川、木曾川の、どんよりと三条並んだ上を、晩方通つたが、水が油のようだから、汽車の音もしないまでに、鵜の橋をかささぎこつてすべ銀河を渡つたと思つた、それからというものは、夜に入つてこの伊勢路へかかるのが、何か、雲の上の国へでも入るようだったもの、どうして、あの人形に、心持を悪くしてなるものか。」

「これは、旦那様お世辞のいい、土地を賞められまして何より嬉しゅうござります。で何でござりまするか、一刻も早く御参詣を遊ばそう思召で、ここらまで乗切つていらつしやいました？」

「そういうわけでもないが、伊勢音頭を見物するつもりもなく、

古市より相の山、第一名が好いではないか、あいの山。」

客は何思ほおいけん手を頬ほおにあてて、片手で弱々と胸いだを抱いたが、

「お婆ばあさん、昔から聞き馴な染じの、お杉お玉というのは今でもある

のか。」

「それはござりますよ。ついこの前途さきをたらたらと上りました、

道で申せばまず峠みせもののような処みせものに觀世物の小屋がけになつて、やつ

ぱり紅白粉べにおしろいをつけましたのが、三味線さみせんでお鳥ちようもく 目ちようもくを受けるの

でござります、それよりは旦那様、前方さきに行つて御覽じやりまし、

川原ゆききに立つておりますが、三十人、五十人、橋ゆききを通行のお方から、

お錢あしの礫つぶてを投なげて頂ないで、手ながざおに長棹さきの尖さきへ網とんぼを張なりました

ので、宙とんぼで受け留とんぼめますが、秋口蜻蛉とんぼの飛とんぼびますようとんぼでござり

ます。橋の袂たもとには、女房達が、ずらりと大地に並びまして、一文二文りようがえに両換ないくうさまをいたします。さあ、この橋が宇治橋と申しまして、内宮様へ入口でござりまする。川は御存じの五十鈴川、山かみじやまは神路山。その姿の優しいこと、気高いこと、尊いこと、清いこと、この水に向うて立ちますと、人ひとはだ膚うしろが背後から皮を透とおして透いて見えます位、急にも流れず、淀よどみもしませず、浪なみの立つ、瀬というものもござりませぬから、色も、蒼あおくも見えず、白くも見えず、緑の淵ふちにもなりませず、一様に、真ほんの水色というのでござりましょ。

渡りますと、それから三千年の杉の森、神代かみよから昼も薄暗い中を、ちらちらと流れまする五十鈴川を真まんなか中に、神路山が裏つつみま

して、いつも静しずかに、神風がここから吹きます、ここに白木造しろきづくりの尊いお宮がござりまする。」

四

「内宮ないぐうでいらつしやいます。」

婆々ばばは掌てを挙げて白髪かみの額かみに頂き、

「何事のおわしますかは知らねども、忝かたじけなさに涙なみだこぼるる、自然ひとりで

に頭つむりが下りまする。お帰りには二見ふたみヶ浦、これは申上げるまでも

ござりませぬ、五十鈴川の末、向うの岸、こつちの岸、枝の垂れた根上り松もやに纏もやいまして、そこへ参る船もござります。船頭たち

がなぜ素袍すおうを着て、立烏帽子たてえぼしを被かぶつていないと思うような、尊うやい川もござりまする、女の曳ひきます俵くるまもござります、ちようど明日は旧の元日。初日の出、」

いいかけて急に膝ひざを。

「おお、そういえば旦那様だんなさま、お宿はどうなさります思召おぼしめし。

成程、おっしゃりました名の通とおり、あなた相の山までいらつしやいましたが、この前方さきへおいでなさりましても、佳いい宿はござりません。後方あとの古市ふるいちでござりませんと、旦那様方がお泊りになりまする旅籠はござりませんが、何にいたしました処で、もし、ここのごとでござりまする、必ず必ずお急せぎ立て申しますではないのでござりまするけれども、お早く遊ばしませぬと、お泊とまりが難

しゅうござりますので。

はい、いつもまあこうやって、大神宮様のお庇かげで、繁昌はんじょうを

いたしまするが、旧の大晦日おおみそかと申しますと、諸国の講こう中じゅう、

道者どうじゃ、行者ぎょうじゃの衆しゆ、京、大阪は申すに及びませぬ、夜一夜、

古市こもりでお籠こもりをいたしまして、元朝、宇治橋を渡りまして、貴客あなた、

五十鈴川で嗽手水うがいちようず、神路山を右に見て、杉の樹立こだちの中を出て、

御廟おたまやの前ではのぼのと白しらみますという、それから二見ヶ浦へ初

日の出を拝みに廻られまする、大層な人数。

旦那様お通りの時分には、玉ころがしの店、女郎屋の門かどなどは

軒のきなみ並戸あが開いておりましたございませうけれども、旅籠屋は

大抵戸を閉めておりましたことと存じまする。

どの家も一杯で、客が受け切れませんのでござります。」

婆々はひしひし、大手の木戸に責め寄せたが、

「しかし貴客、三人、五人こぼれますのは、旅籠でも承知のこ

と、相宿でも間に合いませんから、廊下のはずれの囲だの、数寄

な四阿だの、主人の住居などで受けるでござりますよ。」

と搦手を明けて落ちよというなり。

けれども何の張合もなかった、客は別に騒ぎもせず、さればつ

て聞棄てにもせず、何の機会もないのに、小形の銀の懐中時計

をぱちりと開けて見て、無雑作に突込んで、

「お婆さん、勘定だ。」

「はい、あなた、もし御飯はいかがでござります。」

客は仰向あおむいて、新あらたに婆々の顔を見て莞爾かんじとした。

「いや、実は余り欲しくない。」

「まあ、ソレ御覧ごらんじまし、それだのに、いかなこツても、酢蛸すだこを食ありたいなぞとおっしゃって、夜遊びをなすつて、とんだ若様でござります。どうして婆々が家の一膳飯いちぜんめしがお口に合いますものでござります。ほほほほ。」

「時に、三由屋みよしやという旅籠はあるね。」

「ええ、古市一番の旧家で、第一等の宿屋でござります。それでも、今夜あたりは大層ひとなお客でござりましよ。あれこれとおっしゃつても、まず古市では三由屋で、その上に講こう二元もとのことでござりまするから、お客は上中下とも一杯でござります。」

「それは構わん。」といって客は細く組違えていた膝を割つて、二ツばかり靴の爪尖つまさきを踏んで居直つた。

「まあ、何ということでござります、それでは氣を揉もむではなかつたに、先へ誰方どなたぞお美しいのがいらしつて、三由屋でお待受けなのでござりますね。わざと迷まい見ごになんぞおなり遊ばして、可ようござります、翌日あすは暗い内から婆々が店頭みせさきに張番をして、芸妓げいこさんとでも腕車くるまで通つて御覧じやい、お望のぞみの蛸の足を放りつけて上げますに。」と煙草きせるを下へ、手で掬すくつて、土間から戸外そとへ、…や…ちよつと投げた。トタンに相の山から戻腕車もどりぐるま、店さきを通りかかつて、軒にはたはたと鳴る旗に、フト楯かじを持ったまま仰とまいで留る。

「くるまや
車夫。」

「はい。」と媚なまめしい声、婦人おんなが、看板をつけたのであつた、古市

組合。

五

「はッ。」

ふるいちふるいちに名代なだいの旅店、三由屋みよしやの老番頭、次の室まの敷居敷居際にびた

りと手をつき、

「はッ申上げまするでございまする。」

上段の十畳、一点よごれの汚よごれもない、月夜のような青畳、
紫むらさき縮ちりめ

緬すみれふツくりとある蒲団ふとんに、あたかもその雲に乗つたるがごとく、
 董よそおいの中から抜けたような、装を凝こらした貴夫人一人。さも旅たびづ疲かれ
 の状さま見えて、鼠地ねずみじの縮緬ちぢみに、麻の葉鹿かの子の下着の端、媚なまめかし
 きまで膝ひざを斜ななめに、三枚さんまい襲がさねで着き瘦やせのした、撫なで肩がたの右を落おし
 て、前まへなる桐火桶きりひおけの縁ひきに、引ひつけた火箸ひばしに手をかけ、片手ほっそを細
 りと懐なごにした姿。衣紋えもんの正ただしく、顔の気高きたかきに似にず、見好みよげに過
 ぎて婀娜あだめくばかり。眉の鮮あざかさ、色の白しろさに、美うつくしき血ちあり、
 清あやき肌はある女にょしやう性せいとこそ見みゆれ、もしその黒髪くろかみの柳やなぎ濃こく、生はえぎ
 際わの颯さつと霞かすんだばかりであつたら、画えがける幻まぼろしと誤あやるであらう。
 袖そで口くち、八やつくち口くち、裳もすを溢こぼれて、ちらちらと燃もゆる友染ゆうぜんの花くれないの紅
 にも、絶つえず、一ひとむら叢むらの薄雲うすぐもがかかつて、淑つましげに、その美うつくし

擁護するかのごとくである。

岐阜県××町、——里見稲子さとみいなこ、二十七、と宿帳に控えたが、あ

えて誌すまでもない、岐阜の病院の里見といえ、家族雇人一同

神のごとくに崇拜する、かつて当家の主人あるじが、難病を治した名医、

且つ近頃三由屋が、株式で伊勢の津つに設立した、銀行の株主であるから。

晩景、留守を預るこの老番頭にあてて、津に出張中の主人あるじから、

里見氏の令夫人参宮あり、丁寧ていねいに宿を参らすべき由、電信があつ

たので、いかに多数の客があつても、必ず、一室ひとまを明けておく、

内証の珍客のために控えの席へ迎え入れて、滞りとどなく既に夕餉ゆうけを

進めた。

されば夫人が座の傍かたわら、肩掛かたかけ、頭巾づきんなどを引掛けた、衣桁いこうの際きわに
 は、萌黄もえぎの緞子どんすの夏なつ衾ふすま、高く、柔かに敷設けて、総附ふさつきの塗ぬ
 枕まくら、枕頭まくらもとには蒔絵まきえものの煙草盆たばこぼん、鼻紙台なびしだいも差置いた、
 上に香炉かうろを飾つて、呼鈴よびりんまで行届ゆきとどき、次の間の片隅かたぐみには棚たなを
 飾つて、略式りやくしきながら、薄茶うすちやの道具道具一通。火鉢かまには釜かまの聲はるか、遙はるかに神
 路山かみの松まつに通い、五十鈴川いそがわの流ながれに応じて、初夜はつやも早はやや過ぎたる折
 から、ここの行燈あんどうとかしこのランプと、ただもう取交とりかえるばか
 りの処ところ。

「ええ、奥方様、あなた様にお客にござりまして。」
 優しい声で、

「私に、」と品よく応じた。

「はッ、あなた様にお客きやく来くらひらいにござりまする。」

夫人はしとやかに、

「誰方どなただね、お名札なふだは。」

「その儀にござりまする。お名札をと申しますと、生憎あいにく所持しせ

ぬ、とかようにおつしやいまする、もつともな、あなた様お着つきが

晩おそうござりましたで、かれこれ十二時。もう遅うござりまするに因

つて、御一人旅の事ではありまするし、さようなお方は手前ども
 においでがないと申して断りましようかとも存じましたなれども、
 たいせつなお客様、またどのような手落になりましたても相成らぬ
 儀と、お伺いに罷まかり出りましてござりまする。」

番頭は一大事のごとく、固くなつて、御意を得ると、夫人は何

事もない風情、

「まあ、何とおっしゃる方。」

「はッ立花様。」

「立花。」

「ええ、お少い^{わか}お人柄な綺麗^{きれ}な方でおあんなさいまする。」

「そう。」と軽く^{かろ}いって、莞爾^{にっこり}して、ちよつと膝を動かして、少し火桶を前へ押して、

「ずんずんいらつしやれば可い^いのに、あの、お前さん、どうぞお通し下さい。」

「へい、宜^{よろ}しゆうござりますか。」

頤^{おとが}の長い顔をぼんやりと上げた、余り夫人の無雑作なのに、ち

と氣^{てい}抜けの体^{てい}で、立^{たちあが}揚る膝^かが、がツくり、ひよろりと手^てをつき、
にがわらい 苦^く笑^{わら}をして、再び、

「はッ。」

六

やがて入^{いり}交^{かわ}つて女中^{にようぢゆう}が一^{いち}人^{にん}、今夜^{こんや}の忙^{いそ}しさに親類^{おやぢゆう}の娘^{むすめ}が臨^ま時^{とき}手^て伝^{でん}という、娘柄^{むすめがら}の好^{この}い、爪^{つま}はずれの尋常^{じんじょう}なのが、

「御免^{ごめん}遊ばしまし、あの、御支度^{ごしだ}はいかがでございます。」

夫人^{ふじん}この時は、後^{おく}毛^けのはらはらとかかつた、江戸紫^{えどむらさき}の襟^{えり}に映^{うつ}る、雪^{ゆき}のような項^{うなじ}を此^こ方^{なた}に、背^{うしろ}向^{むき}に火桶^{ひおけ}に凭^{より}掛^かっていたが、

軽く振向き、

「ああ、もう出来てるよ。」

「へい。」と、その意を得ない様子で、三指のまま頭を上げた。事もなげに、

「床なんだろう。」

「いいえ、お支度でございますが。」

「御飯かい。」

「はい。」

「そりやお前疾まいしとうに済んだよ。」と此方こなたも案外な風情、余の取込あまりとりこみにももの忘れした、旅籠屋はたごやの混雑が、おかしそうに、莞爾にっこりする。

女中はまた遊ばれると思つたか、同じく笑い、

「奥様、あの唯ただいま今のお客様のでございます。」

「お客だい、誰も来やしないよ、お前まい。」と斜めに肩ごしに見遣みやつたまま打棄うちちやつたようにものすつきり。かえす言ことばもなく、

「おや、おや。」と口の中、女中は極きまりの悪そうに顔を赤らめながら、変な顔をして座中をみまわすと、誰も居ないで寂しんとして、釜かまの湯がチンチン、途切れてはチンという。

手持不沙汰てもちぶさたに、後退あとじさりにヒヨイと立って、ぼんやりとして襖ふすまがくれ、

「御免なさいまし。」と女中、立消えの体ていになる。

見送みおくりもせず、夫人はちよいと根の高い円鬚まるまげの鬢びんに手を障さわつて、金蒔きんまきえ絵の鼈甲べっこうの櫛くしを抜くと、指環ゆびわの宝玉たからぎきらりと動いて、

後毛を搔撫かいなでた。

廊下をばたばた、しとしとと畳ざわり。襖に半身を隠して老番頭、呆れ顔の長いのを、擡もたげるがごとく差出したが、急せきこ込んだ調子で、

「はッ。」

夫人は蒲団ふとんに居直り、薄い膝に両手をちやんと、媚なまめかしいが威儀正しく、

「寝ますから、もうお構いでない、お取込の処を御厄介ねえ。」
「はッはッ。」

遠くから長廊下を駈かけて来た呼吸いきづかい、番頭は口に手を当てて打うちしわぶ咳きき、

「ええ、混雑ごたごたいたしましたして、どうも、その実に行届ゆきとどきません、平ひらに御勘弁下さいまして。」

「いいえ。」

「もし、あなた様、希有けうでござります。確かたった今、私わたくしが、こちらへお客人をお取次申しましてござりましてござりまするな。」

「そう、立花さんという方が見えたつてお謂いいだつたよ。どうかしたの。」

「へい、そこで女どもをもちまして、お支度の儀を伺わせました処、誰方どなたもお見えなさりませんそうでござりまして。」

「ああ、そう、誰もいらつしやりやしませんよ。」

「はてな、もし。」

「何なの、お支度ツて、それじゃ、今着いた人なんですか、内に泊つてでもいて、宿帳で、私のいることを知ったというような訳ではなくツて？」

「何、もう御覧の通、とおりこちらは中庭を一ツ、はしがかり橋懸で隔てました、ひとま一室別段のお座敷でござりますから、さのみ騒々しゆうもございませんですが、二百余りの客でござりますで、宵の内はまるで戦い争くさ、帳場の傍はたにも囲炉裡いろりの際きわにも我勝われがちで、なかなか足腰も伸びません位、野陣のじん見るようでござります。とてもどうもこの上お客の出来る次第ではござりませんで、早く大戸を閉めました。帳場はどうせ徹夜よあかしでござりますが、十二時という時、腕車くるまが留まって、門かどをお叩きなさいまする。」

七

「お気の毒ながらと申して、お宿を断らせました処、連つれが来て泊
 っている。ともかくも明けい、とおっしゃりますについて、あの、
 入口の、たいてい原ほどはござります、板の間が、あなた様、道ど
 者うじやしゆう衆いっばいで充満あしづみで、足踏あしづみも出来ません処から、框かまちへかけさせ
 申して、帳場の火鉢を差上げましたような次第で、それから貴あなた
 女さま様がお泊りの筈はず、立花が来たと伝えくれない、という事でござ
 りまして。

早速お通し申し申しましょうかと存じましたなれども、こちら様は

お一方ひとかた、御婦人でいらつしやいます事ゆえ念のために、私わたくしお伺いに
 出ました儀で、直ぐにといい御意にござりましたで、引返ひっかえ
 して、御案内。ええ、唯ただいま今の女が、廊下をお連れ申したでござ
 ります。

女が、貴女様このお部屋へ、その立花様というのがお入り遊ば
 したのを見て、取つて返しましたで、折返して、お支度の程を伺
 わせに唯今差出しました処、何か、さような者は一向お見えがな
 いと、こうおつしやいます。またお座敷には、奥方ほか様の他に誰方どなた
 もおいでがないと、目を丸くして申しますので、何を寝惚ねぼけおる
 ぞ、汝てまえが薄眠い顔をしておるで、お遊びなされたである、なぞと
 叱言こごとを申しましたが、女いまするには、なかなか、洒落しやれを遊ば

す御様子ではないと、真顔でござりますについて、ええ、何より証拠、土間を見ましてございます。」

いいかけて番頭、片手敷居越に乗出して、

「トその時、お上りあがになつたばかりのお穿物はきものが見えませぬ、洋服でおあんなさいましたで、靴くつにござりますな。」

さあ、居合せましたもの総そうだち立たちになつて、床下まで覗のぞきました
が、どれも札をつけて預りました穿物ばかり、それらしいのもござりませぬで、希有けうじやと申出しますと、いや案内に立つた唯今の女は、見す見す廊下をさきへ立つて参つたというて、蒼あおくなつて震えますするわ。

太いこう恐こわがりましたしてこちらへよう伺えぬと申しますので、手前か駈

出して参りましたが、いえ、もし全くこちら様へは誰方もおいでなさりませぬか。」と、穩おだやかならぬ気色である。

夫人、するりと膝をずらして、後へ身を引き、座蒲団の外へ手の指を反そらして支つくと、膝すべを這つった桃色の絹のはんけちが、褌つまの折お端りはしへはらりと溢こぼれた。

「厭いやだよ、串じょうだん戯ごではないよ、穿物がないんだつて。」

「御意にござりまする。」

「おかしいねえ。」と眉をひそめた。夫人の顔は、コオトをかけた衣いこう衿しんの中に眉暗く、洋燈ランプの光の隈くまあるあたりへ、魔のかげがさしたよう、円鬚まげの高いのも艶つや々つやとして、そこに人が居いそうな気け勢はいである。

畳から、手をもぎ放すがごとくにして、身を開いて番頭、固く
なつて一呼吸ひといきつき、

「で、ござりまするなあ。」

「お前、そういえば先刻さつき、ああいつて来たもんだから、今にその
人が見えるだろうと、火鉢の火なんぞ、突つついていると、何なの、
しばらくすると、今の姐ねえさんが、ばたばた来たの。次の室まのそこ
へちらりと姿を見せたつけ、私はお客が来たと思つて、言ことばをかけ
ようとする内に、直ぐ忙せわしそうに出て行つて、今度来た時には、
突いきなり然、お支度はつて、お聞きだから、変だと思つて、誰も来や
しないものを。」とさも訝いぶかしげに、番頭の顔を熟じつと見ていう。
いよいよ、きよとつき、

「はてさて、いやどうも何でござりまして、ええ、廊下を急いそぎあ足しにすたすたお通んなすつたと申して、成程、登あしおと音がしなかつたなぞと、女は申しますが、それは早や、気のせいでござりましょう。なにしろ早足で廊下を通りなすつたには相違ござりませぬ、さきへ立つて参りました女が、せいせい呼吸いきを切つて駈けまして、それでどうかすると、背後うしろから、そのお客の身体からだが、ぴつたり附着くつつきそうになります。」

番頭は気がさしたか、密そつと振返つて背後うしろを見た、釜かまの湯は沸たぎつているが、塵ちり一つ見当らず、こういう折には、余りに広く、且つ余りに綺麗きれいであつた。

「それがために二三度、足が留まりましたそうにござりまして。」

八

「中にはその立花様とおつしやるのが、ひょうきん 剽 軽な方で、ひとつ 一番三由屋をお担ぎなさるのではないかと、申すものもござりまするが、この寒いに、おもて 戸外からお入りなさったきり、しやれ 洒落にかくれんぼを遊ばす陽気ではござりません。殊に靴までお隠しなさりますなぞは、ておも ちと手重過ぎまするで、どうも変でござりまするが、とし お年紀頃、ごよろ 御容子は、さつき 先刻申上げましたので、その方に相違ござりませぬか、お綺麗な、品の可い、おもなが 面長な。」

「全く、そう。」

「では、その方は、さような御串戯ごじょうだんをなさる御人体ごじんていでござりまするか、立花様とおつしやるのは。」

「いいえ、大人おとなしい、沢山たんと口もきかない人、そして病人なの。」
そりやこそと番頭。

「ええ。」

「もう、大したことはないんだけど、ひとしきり一時は大病でね、内の病院に入っていたんです。東京で私がきょうだい姉妹のようにした、さるお嬢さんの従兄いとこ子でね、あの美術、何、彫刻ほりものし師なの。国々を修行あるに歩行あるしている内、養老の滝を見た帰りがけに煩わづらつて、宅で養生をしたんです。二月ばかり前から、大層、よくなつたには、よくなつたんだけど、まだ十分でないツていうのに、肯きかない

でまた旅へ出掛けたの。

私が今日こちらへ泊つて、翌朝あしたお参まいりをするツてことは、かねがね話をしていたから、大方旅行先から落合つて来たことと思つたのに、まあ、お前、どうしたというのだらうね。」

「はッ。」

というど肩をすぼめて首こうべを垂れ、

「これは、もし、旅で御病気かも知れませぬ。いえ、別に、貴あなた女様さまお身体からだに仔細しさいはござりませぬが、よくそうしたことがある

ものにござります。はい、何、もうお見上げ申しましたばかりでも、奥方様、お身のまわりへは、寒い風だとて寄ることではござりませぬが、御帰宅の後はおこころにかけられて、さきざきお尋

ね遊ばしてお上げなされまし、これはその立花様とおつしやる方が、親御、御兄弟より貴女様を便りに遊ばしていらつしやるに相違ござりませぬ。」

夫人はこれを聞くうちに、差俯向いて、両方引合せた袖口の、襦袢の花に見惚れるがごとく、打傾いて伏目でいた。しばらくして、さも身に染みたように、肩を震わすと、後毛がまたはらはら。

「寒くなつた、私、もう寝るわ。」

「御寝なります、へい、唯今女中を寄越しまして、お枕頭もまた、」

「いいえ、煙草は飲まない、お火なんか沢山。」

「でも、その、」

「あの、しかしね、間違えて外の座敷へでも行つていらつしやりはしないか、気をつけておくれ。」

「それはもう、きつと、まだ、方々見させてさえござりまする。」

「そうかい、此家うちは広いから、また迷まいご児にでもなつてると悪い、

可愛い坊ちゃんなんだから。」とぴたりと帯に手を当てると、帯しめの金金具きんかなぐが、指の中でパチリと鳴る。

先刻さつきから、ぞくぞくして、ちりけ元は水のような老番頭、思いの外、女客の恐れぬを見て、この分なら、お次へ四天王にも及ぶまいと、

「ええ、さようならばお静しずかに。」

「ああ、御苦労でした。」と、いつてすツと立つ、汽車の中からそのままの下じめがゆるんだか、絹足袋の先へ長襦袢、右の襟つまがぞろりと落ちた。

「お手水。」
ちようず

「いいえ、寝るの。」

「はッ。」と、いうと、腰を上げざまに襖ふすまを一枚、直ぐに縁側へ這すべつて出ると、呼吸いきを凝こらして二人ばかり居た、恐こわいもの見たさの徒てあい、ばたり、ソツと退のく氣勢けはい。

「や。」という番頭の声に連れて、足も裾すそも巴ともえに入乱るるかのごとく、廊下を彼方あなたへ、隔あつてまた登あしおと音、次第に登音。この汐しおに、そこら中の人声を浚さらえて退のいて、果はては遥はるかな戸外二階の突外とつばずれの

角あたりと覺しかつた、三味線の音がハタと留んだ。

聞澄して、里見夫人、裳を前へ捌こうとすると、うつかりし

た棲がかかつて、引留められたようによろめいたが、衣袴に手を

かけ、四辺をし、向うの押入をじつと見る、瞼に颯と薄紅梅。

九

煙草盆、枕、火鉢、座蒲団も五六枚。

(これは物置だ。)と立花は心付いた。

はじめは押入と、しかしそれにしては居周囲が広く、破れては

いるが、筵か、畳か敷いてもあり、心持四畳半、五畳、六畳ばか

りもありそうな。手入をしない困かこいなぞの荒れたのを、そのまま押入に遣つかっているのであろう、身を忍ぶのは誂あつらえたようであるが。

(待て。)

案内をして、やがて三由屋の女中が、見えなくなるが疾はやいか、ものをいうよりはまず唇おののの戦くまで、不義ではあるが思う同士。目を見交みかわしたばかりで、かねて算した通り、一先ひとまず姿を隠したが、心の闇やみより暗かった押入の中が、こう物色の出来得るは、さては目が馴なれたせいであらう。

立花は、座敷を番頭の立去ったまで、半時ばかりを五六時間、待飽まちあぐ倦ぐんでいたのであった。

(まず、可よし。)

と襖ふすまに密そつと身を寄せたが、うかつに出らるる数かずでなし、言ことばをか
 けらるる分ぶんでないから、そのまま呼い吸きを殺ころしてたたずず、ややあつ
 て、はらはらと衣きぬの音おと信ない。

目め前さきへ路みちがついたように、座敷ざしきをよぎる留南奇とめぎの薫かおり、ほの床ゆかし
 く身に染しむと、彼方かなたも思おもう男おとこの人香ひとかに寄よる蝶ちよう、処たがを違ちがえず二枚ふたまいの
 襖ふすまを、左の外ひだり、立花たちばなが立たつた前まへに近ちかづき、

「立花さん。」

「……………」

「立花さん。」

襖ふすまの裏うらへ口くちをつけるばかりにして、

「可いいんですか。」

「まだよ、まだ女中が来るツていうから少々、あなた、靴まで隠して来たんですか。」

表に夫人の打微笑む、目も眉も鮮麗に、人丈に暗の中に描かれて、黒髪の輪郭が、細く円鬚を劃つて明い。

立花も莞爾して、

「どうせ、騙すくらいならと思つて、外套の下へ隠して来ました。」

「旨く行つたのね。」

「旨く行きましたね。」

「後で私を殺しても可いから、もうちと辛抱なさいよ。」

「お稲さん。」

「ええ。」となつかしい低声こせいである。

「僕は空腹。」

「どこかで食べて来た筈はずじゃないの。」

「どうして貴方あなたに逢あうまで、お飯まんまが咽喉のどへ入るもんですか。」

「まあ……」

黙つてしばらくして、

「さあ。」

手を中へ差入れた、紙包そつを密と取つて、その指からが搦なむ、手と手を二人。

へだて

隔へだての襖あはは裏表、両方の肩でお圧されて、すらすらと三寸ばかり、

暗き柳と、曇れる花、淋さみしく顔を見合せた、トタンにあしおと登音、続

いて登音、夫人は衝つと退のいて小さな咳しわぶき。

さそくに後を犇ひしと閉め、立花は掌たなそこに据えて、瞳ひとみを寄せると、軽く捻ひねった懷紙ふところがみ、二隅ふたすみへはたりと解けて、三ツ美うつくしく包んだのは、菓子である。

と見ると、白くれなと紅ないなり。

「はてな。」

立花は思わず、膝ひざをついて、天井を仰いだが、板か、壁か明かならず、低いか、高いか、定さだかでないが、何となく暗夜やみよの天まで、布一重ひとえ隔へつるものがないように思われたので、やや急せき心しんになつて引寄せて、袖そでを見ると、着たままで隠れている、外套がいとうの色ほのかが灰ほのかに鼠。

菓子の色、紙の白きさえ、ソレかと思ゆるに、仰げば節穴かと思あかりう明もなく、その上、座敷から、射さし入るような、透すきま間は些すこしもないのであるから、驚いて、ハタと夫人の賜物たまものを落して、その手でじつと眼まなこを蔽おほうた。

立花は目よりもまず氣を判はつきり然と持とうと、両手で顔を蔽う内、まさに人道を破壊しようとする身であると心付いて、やにわに手を放して、その手で、胸を打つて、がばと眼まなこを開いた。

なぜなら、今そうやって跪ひざまずいた体は、神なりに対し、仏まなこに対して、ものを打うちねん念ずる時の姿勢であると思つたから。

あわれ、覚悟の前ながら、最早もはや神仏を礼拝し得べき立花ではないのである。

さて心から鬼のごとき目を睜くと、余り強く面を圧していた、ためであろう、襖一重の座敷で、二人ばかりの女中と言葉を交わす夫人の声が、遠く聞えて、遥に且つ幽に、しかも細く、耳の端について、震えるよう。

それも心細く、その言う処を確めよう、先刻に老番頭と語るのをこの隠れ家で聞いたるごとく、自分の居処を安堵せんと欲して、立花は手を伸べて、心覚えの隔ての襖に触れて試た。

人の妻と、かかる術して忍び合うには、疾く我がためには、神なく、物なく、父なく、母なく、兄弟なく、名誉なく、生命のな
いことを悟っていたけれども、ただ世に里見夫人のあるを知つて、神仏より、父より、母より、兄弟より、名誉より、生命よりは便

にしたのであるが。

こはいかに掌たなは、徒いたずらに空くうを撫なでた。

慌あわしく丁ちようと目の前へ、一杯に十指を並べて、左右に暗やみを搔かい探さぐ

つたが、遮るものは何にもない。

さては、暗やみの中に暗をかさねて目を塞ふさいだため、脳に方角を失つたのであろうと、まず慰めながら、居直つて、今まで前にしたと反対の側を、衝つと今度は腕かいなを差出すようにしたが、それも手ばかり。

はツと俯うつむ向き、両方へ、前後に肩を分けたけれども、ざらりと外套の袖の揺れたるのみ。

かつと逆のぼ上せて、堪たまらずぬつくり突つ立たつたが、南無なむさん三物音が、

とぎよツとした。

あツという声が出て、女中が襖をと思ふに似ず、寂莫せきばくとして、ただ夫人のものいうと響くのが、ぶるぶると耳について、一筋ずつ髪の毛を伝うて動いて、人事不省ふせいならんとする、瞬間に異ならず。

同時に真直まつすぐに立つた足許に、なめし皮の樺色かばいろの靴、宿を欺くため座敷を抜けて持つて入ったのが、向うむきに揃っていたので、立花は頭から悚然ぞっとした。

靴が左から……ト一ツ留とまつて、右がその後から……ト前へ越すと、左がちよい、右がちよい。

たとえば歩行の折から、爪尖つまさきを見た時と同じ状さまで、前途ゆくてへ進

行をはじめたので、あなや啊呀と見る見る、けんげん二間三間。

十間、十五間、一町、半、二町、三町、かなた彼方に隔るのが、どうして目に映るのかと、あやし怪む、とあらず、歩を移すのはかれ渠自身、す

なわち立花であつた。

ぼうぜん茫然。
茫然。

世に茫然という色があるなら、あたり四辺の光景は正しくそれ。月も

なく、日もなく、樹もなく、草もなく、みち路もない、雲に似て踏み

ごたえがあつて、雪に似てつめた冷からず、おぼろよ朧夜かと思えば暗く、し東

ののめ

雲かと思れば陰々たる中に、煙草盆、枕、火鉢、こたつやぐら炬燵櫓の形

など左右、ふたなら一一列びに、ぶぞろ不揃いに、たくあん沢庵の樽もあり、いしうす石臼も

あり、まないた俎板あり、灯のない行燈も三ツ四ツ、あたかも人のな

い道具市。

しかもその火鉢といわず、臼といわず、枕といわず、行燈といわず、一斉に絶えずかすかゆらに揺いで、国が洪水に滅ぶる時、呼吸いきのあことごとるは悉く死して、かかる者のみただよ漾う風情、ただソヨとの風もないのである。

十

その中うちに最も人間に近く、頼母たのしく、且つ奇異に感じられたのは、唐櫃からびつの上に、一個八角時計の、仰向けあおむに乗っていた事であった。立花は夢心地にも、何等か意味ありげに見て取ったので、

つかつかと靴を近ちかづけて差さ覗しのぞいたが、ものの影を見るごとき、四あ辺たりは、針の長短と位地を分ち得るまでではないのに、判はつきり然と時間まが分つた。しかも九時半の処を指して、時計は死んでいるのであるが、鮮あざやか明あにその数字さえ算かぞえられたのは、一点、螢ほたるび火の薄く、そして瞬またたきをせぬのがあつて、胸のあたりから、斜ななめに影を宿したためで。

手を当てると冷つめたかつた、光が隠れて、掌たなそこに包まれたのは襟えりかぎ飾りの小さな宝石、時に別に手首を伝い、雪のカウスに、ちらちらと樹この間から射さす月の影、露こぼの溢こぼれたかと輝いたのは、蓋けだし手て釦ぼたんの玉である。不思議と左を見詰きらめめると、この飾もまた、光を放はなつて、腕かいなを開くと胸がまた晃きらめきはじめた。

この光、ただに身に添うばかりでなく、土に砕け、宙に飛んで、
 翠の蝶の舞うばかり、目に遮るものは、白も、桶も、皆これ青
 貝摺の器に齊い。

一足進むと、歩くに連れ、身の動くに従うて、颯と揺れ、澆と
 散つて、星一ツ一ツ鳴るかとはばかり、白銀黄金、水晶、珊瑚
 珠、透間もなく鎧うたるが、月に照添うに露違わず、されば冥
 土の色ならず、真珠の流を渡ると覚えて、立花は目が覚めたよう
 になつて、姿を、判然と自分を視めた。

我ながら死して榮ある身の、こは玉となつて砕けたか。待て、
 人の妻と逢曳を、と心付いて、首を低れると、再び真暗にな
 った時、更に、しかし、身はまだ清らかであると、気を取直して

改めて、青く燃ゆる服の飾を嬉しそうに見た。そして立花は伊勢は横幅の渾沌こんとんとして広い国だと思つた。宵の内通つた山田から相の山、茶店で聞いた五十鈴川、宇治橋も、神路山も、縦に長く、しかも心に透通るように覚えていたので。

その時、もう、これをして、瞬間の以前、立花いたすらが徒あやめに、黒白も分かず焦り悶もだえた時にあらしめば、たちまち驚いて倒れたであらう、一間ゆくてばかり前途の路に、袂たもとを曳ひいて、厚い袴ふきを踵かかとにかさねた、二人、同一扮装おなじいでたちの女めの童わらわ。

豎矢たてやの字の帯の色の、沈あかんで紅したたきさえ認められたが、一度胸ひとたびを蔽おほい、手こまぬを拱こまぬげば、たちどころに消えて見えなくなるであらうと、立花は心に信じたので、騒さまぐ状なくじつと見据えた。

「はい。」

「おむかい迎に参りました。」

駭かくぜん然として、

「私を。」

「内うちかた方でおつしやいます。」

「お召ものの飾から、光の射さすお方を見たら、お連れ申して参りますように、お使つかいでございます。」と交かわる交かわるいつて、向合つて、いたいたけに袖そでをひたりと立つと、真まんなか中に両方から昇かき据えたのは、その面銀おもてのごとく、四方あたかも漆のごとき、一面の将棋盤。

白ぼたんき牡丹の大輪なるに、二ツ胡蝶こちようの狂うよう、ちらちらと捧

げて行く。

今はたとい足許が水になつて、神路山の松ながら人肌を通す流ながれに變じて、胸の中に舟を纜もやう、烏帽子直垂えぼしひたたれをつけた船頭なりとも、乗れとなら乗る氣になつた。立花は怯おめず、臆おくせず、驚破すわといわば、手釦てぼたん、襟飾を隠して、あらゆるものを見ないでおこうと、胸を据えて、静しずかに女めの童わらわに従うと、空はらはらと星になつたは、雲の切れたのではない。霧の晴れたのではない、渠かれが飾れる宝玉の一叢ひとむらの樹立こだちの中へ、倒さかさまに同一光を敷くのであつた。
ここに枝折戸しおりど。

戸は内へ、左右から、あらかじめ待設けた二人の腰元こしもとの手に開かれた、垣は低く、女どもの高髻たかまげは、一対に、地ずれの松の枝

より高い。

十一

「どうぞこれへ。」

椅子いすを差置かれた池みぎわの汀あずまやの四阿あずまやは、瑪瑙めのうの柱、水晶ひやしの廂ひやしであ

ろう、ひたと席あたりに着く、四辺あたりは昼あかるよりも明あかるかった。

その時打向うた卓テエブル子この上へ、女めの童わらわは、密そつと件くだんの将棋盤しょうぎばんを据

えて、そのまま、陽かげ炎ろうの纏もつるよりも、身軽みかろに前後ぜんごして樹うしろの蔭かげ

にかくれたが、枝折戸しおりどを開あいた侍こしもと女には、二人とも立花たちばなの背後うしろに、

しとやかに手を膝ひざに垂たれて差控さかえた。

立花は言葉をかけようと思つたけれども、我を敬うことかくのごときは、打ちつけにものをいうべき次第であるまい。

そこで、卓子に肱をつくと、青く鮮麗に燦然として、異彩を放つ手釦の宝石を便に、ともかくも駒を並べて見た。

王将、金銀、桂、香、飛車、角、九ツの歩、数はかかる境にも異はなかつた。

やがて、自分のを並べ果てて、相手の陣も敷き終る折から、異香ほのぼのとして天上の梅一輪、遠くここに薰るか、遙に樹の間を洩れ来る氣勢。

円形の池を大廻りに、翠の水面に小波立って、二房三房、ゆらゆらと藤の浪、倒に汀に映ると見たのが、次第に近くと三人

の婦人であつた。

やがて四阿の向うに來ると、二人さつと両方に分れて、同一さまに深く、お太鼓の帯の腰を扱帯も広く屈むる中を、靜に衝と抜けて、早や、しとやかに前なる椅子に衣摺のしつとりする音。

と見ると、藤紫に白茶の帯して、白綾の衣紋を襲ねた、黒髪つややの艶かなるに、鼈甲べつこうの中なかざし指ばかり、ずぶりと通した氣高き簾れんじゆう。立花は品位に打たれて思わず頭かしらが下つたのである。

ものの情なさげぶか深く優しき声して、

「待遠かつたでしようね。」

一言いちげんあたかも百雷耳とどろに轟く心地。

「おお、もう駒を並べましたね、あいかわらず性急せつかちね、さあ、

あなた
 貴下から。」

立花はあたかも死せるがごとし。

「私からはじめますか、立花さん……立花さん……」

正にこの声、たしか確にその人、我が年紀とし十四の時から今に到るまで

一日も忘れたことのない年紀としうえ上の女に初恋の、その人やがて都の

華族に嫁して以来、十数年間ひとたび一度もその顔を見なかつた、絶ぜつだ

代の佳人かじんである。立花は涙も出ず、声も出ず、いうまでもない

が、幾年月いくとしつき、寝ても覚さめても、夢に、現うつに、くりかえしくりかえ

しいかに考えても、また逢う時にいい出づべき言ことばを未だ知らずに

いたから。

さりながら、さりながら、

「立花さん、これが貴下あなたの望のぞみじゃないの、天下晴れて私とこの四阿で、あの時分九時半から毎晩のように遊びましたね。その通りにこうやって将棊しょうぎを一度さそうというのが。

そうじゃないんですか、あら、あれお聞きなさい。あの大勢の人声は、皆みんな、貴下あなたの名誉を慕うて、この四阿へ見に来るのです。

御覧なさい、あなたがお仕事が上手になると、望のぞみもかなうし、そうやってお身体からだも輝くのに、何が待遠くつて、道ならぬ心を出さんです。

こうして私と将棊をさすより、余所よその奥さんと不義をするのが望のぞみなの？」

衝つと手を伸のばして、立花が握りしめた左の拳こぶしを解くがごとくに手

を添えつつ、

「もしもの事がありますと、あの方もお可哀かわいそうに、もう活いきてはおられません。あなたを慕こつて下さるなら、私も御恩がある。そういうあなたが御料簡ごりょうけんなら、私が身を棄すててあげましょう。一所になつてあげましょうから、他よその方に心こころ得違えちがひをしてはなりません。」と強くいうのが優しくなつて、果はは涙になるばかり、念ねん被び観かん音のん力りき 観音の柳の露より身にしみじみと、里見は取られた手が震えた。

うしろ

後にも前にも左右にもすくすくと人の影。

「あッ。」とばかり戦わいないて、取去ろうとすると、自若じじやくとして、

「今では誰が見ても可いいんです、お心が直りましたら、さあ、将

碁をはじめましょう。」

静しずかに放すと、取られていた手がげつそり瘦やせて、着た服が広くなつて、胸もぶわぶわと皺しわが見えるに、屹きつと目を睜みはる肩に垂れて、渦うずまいて、不思議や、己おのが身は白髪になつた、時に燦さんぜん然として身の内の宝玉は、四辺あたりを照てらして、星のごとく輝いたのである。

驚いて白髪しらかを握ると、耳が暖ふすまく、襖ふすまが明いて、里見夫人、莞にっこ爾りして靦のぞきこ込んで、

「もう可いいんですよ。立花さん。」

操は二人とも守り得た。彫刻師はその夜うちの中に、人知れず、暗やみながら、心の光に縁側を忍んで、裏の垣根を越して、庭を出るその後姿を、立花がやがて物語った現うつの境の幻の道ゆを行くがごとく

に感じて、夫人は肅然として見送りながら、遙はるかに美術家の前程を祝した、誰も知らない。

ただ夫人は一夜ひとよの内に、太いたく面おもやつれがしたけれども、翌あくるひ日、伊勢を去る時、揉もみ合あう旅籠屋はたごやの客にも、陸続たる道中にも、汽車にも、かばかりの美女はなかつたのである。

明治三十六（一九〇三）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第七卷」岩波書店

1942（昭和17）年7月22日発行

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

※底本編者による語注は省略しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年1月30日作成

2020年1月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伊勢之卷

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>